

R. J. リフトンのサバイバー研究における「罪責感の同心円」理念の倫理的可能性
高原耕平（大阪大学）

濃淡の差はあれ、わたしたちはつねにすでに大小の事件や災害を生き延びている。事件の外縁にいた者は自身の偶然の幸運を認識することを避け、グラウンド・ゼロ近くから生き延びた者はその記憶に病み、喪の深みに囚われる。事件の直後には外部世界の前者から被災地内の後者へ共感 *empathy* が集中するが、時間が経つにつれて無関心 *apathy* あるいは拒絶に転ずる。偶然の生存は個人と社会の両面から倫理を試し、傷つける。

本発表で取り上げる R. J. リフトン(1926-)は、こうした「生き延びること」の意味を一貫して探求し続けてきたアメリカの精神科医である。かれのサバイバー（生存者）研究の全体像と主要理念を紹介すること、特に「罪責感の同心円」の理念を取り上げ、現代の倫理学の課題としてこれを再考することが本発表の目的である。

リフトンは反戦ベトナム帰還兵と共に PTSD（心的外傷後ストレス障害）概念の成立に尽力した人物として日本では知られている。しかし、その彼が広島の被爆者の心理学的調査を初めて行った人物でもあることはさほど知られていない。帰還兵や被爆者、中国共産党による洗脳を受けた人々、アウシュヴィッツに加担したドイツ人医師など、歴史的な事件を生き延びたサバイバーの体験と心理をインタビューと精神分析を通じて解釈するのがリフトンの研究の基本スタイルである。

リフトンは上述の被爆者研究のなかで、被爆者と外部社会の心理を「罪責感の同心円」というモデルで記述している。災害や戦災を生き延びたひとが死者に対して罪責感を持つこと（いわゆるサバイバーズ・ギルト）は一般にも知られている。リフトンは、被爆者は原爆死者に、一般の日本人は被爆者に、世界の人々は日本人に対して、核時代を生き延びていることへの罪責感を抱えていると分析する。死者を中心として同心円状に罪責感が広がっているという構図である。被爆者の心理だけを対象とするのではなく、かれらを取り巻く社会環境全体を死生学的観点から解釈する点にリフトンの思想の特徴がある。

生死や被害の差が偶然によって決まり、生き延びた者が罪責感を抱えざるをえないという構造は、自然災害や大規模テロ等にも共通している。そのため、この同心円モデルはこれら原爆以外の現代の災いにも応用可能であると考えられる。特に重要な点は、このモデルによって、サバイバーに対する共感／無関心の問題と、死者への追悼という、現代の災禍に関する2つの倫理学的問題を、同一の地平において分析することが可能になることである。

ただしそのためには、罪責感の存在を指摘するだけではなく、その心理が時間の流れのなかでどのような意味を持つのかという点を再考する必要があるだろう。本発表では、災禍の記憶をめぐる共感 *sympathy* と時間という観点からこの問題を考察する。災禍における強烈で非日常的な体験の記憶は、時間の流れの中で均質に積み重なることはなく、むしろ多様な時間体験の様相をたもったまま人間と社会の存在に外傷的に食い込んでいる。他者に対する罪責感、多様な差異と構造を持つ自他の時間体験が、語りと沈黙の場面で同調しようとする際の感情である。生き延びている者と時間においてもっとも異なる存在は死者である。けれども、死者への追悼という営みにおいて、根本的な時間構造の同調が可能となる。そこで見出される時間は生き残った者同士の共感 *sympathy* の可能性を開く。